16　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。　　〈大阪大〉二〇二二年度出題

　深草のと申しける御時、といふ人、いみじき時にてありける。いと色好みになむありける。しのびてときどきあひける女、おなじにありけり。「今宵かならずあはむ」と契りたる夜ありけり。女いたうして待つに、音もせず。目をさまして、夜やけぬらむと思ふほどに、時申す音のしければ、聞くに、「つ」と申しけるを聞きて、男のもとに、ふといひやりける。

　⒜人心うしみつ今は頼まじよ

といひやりたりけるに、おどろきて、

　⒝夢に見ゆやとねぞすぎにける

とぞつけてやりける。しばしと思ひて、うちやすみけるほどに、寝過ぎにたるになむありける。

　かくて世にもらうあるものにおぼえ、仕うまつる帝、かぎりなくおぼされてあるほどに、この帝、うせたまひぬ。御の夜、御ともにみな人仕うまつりけるなかに、その夜より、この良少将(ア)うせにけり。友だち・も、いかならむとて、しばしはここかしこもとむれども、音耳にも聞えず。法師にやなりにけむ、身をや投げてけむ。法師になりたらば、さてなむあるとも聞えなむ。なほ身を投げたるなるべしと思ふに、世の中にもいみじうあはれがり、どもはさらにもいはず、夜昼、をして、世間の仏神に願を立てまどへど、音にも聞えず。妻は三人なむありけるを、よろしく思ひけるには、「なほ世にじとなむ思ふ」とふたりにはいひけり。かぎりなく思ひて子どもなどあるには、⒞ちりばかりもさるけしきも見せざりけり。このことをかけてもいはば、女も、いみじと思ふべし。われも、えかくなるまじき心地のしければ、寄りだに来で、にはかになむうせにける。

　ともかくもなれ、「かくなむ思ふ」ともいはざりけることのいみじきことを思ひつつ泣きいられて、初瀬の御寺に、この妻まうでにけり。この少将は法師になりて、ひとつをうち着て、世間世界を行ひありきて、初瀬の御寺に行ふほどになむありける。近うゐて行へば、この女、導師にいふやう、「この人かくなりにたるを、生きて世にあるものならば、いまひとたびあひ見せたまへ。身を投げ死にたるものならば、その道なしたまへ。さてなむ死にたりとも、この人のあらむやうを、夢にてもうつつにても、聞き見せたまへ」といひて、わが装束、上下、帯、太刀まで、みなにしけり。みづからも申しもやらず泣きけり。はじめは、「なに人のまうでたるらむ」と聞きゐたるに、わが上をかく申しつつ、わが装束などをかく誦経にするを見るに、心ももなく、悲しきこと、ものに似ず。「走りやいでなまし」と千たび思ひけれども、思ひかへし思ひかへしゐて、夜ひと夜泣きあかしけり。わが妻子どもの泣く泣く申す声どもも聞ゆ。いといみじき心地しけり。されど(イ)念じて泣きあかして、に見れば、蓑もなにも涙のかかりたる所は、血の涙にてなむありける。「いみじう泣けば、血の涙といふものはあるものになむありける」とぞいひける。「そのをりなむ走りもいでぬべき心地せし」とぞ、のちにいひける。

　かかれどなほえ聞かず、御はてになりて、御ぶくぬぎに、よろづの殿上人川原にいでたるに、童のことやうなるなむ、柏に書きたる文をもて来たる。とりて見れば、

　⒟みな人は花の衣になりぬなり苔のよかはきだにせよ

とありければ、この良少将の手に(ウ)見なしつ。「いづら」といひて、もて来し人を世界にもとむれど、なし。法師になりたるべしとは、これにてなむみな人知りにける。されど、いづくにかあらむといふこと、さらにえ知らず。

（『大和物語』による）

＊深草の帝――仁明天皇（八一〇～八五〇、在位八三三～八五〇）。第五四代天皇。

＊良少将――良岑宗貞（八一六～八九〇）。父安世は、桓武天皇の子で、仁明天皇の従弟に当たる。法名は、遍昭。

＊誦経――読経のためのお布施。

＊御ぶくぬぎ――喪服を脱ぐこと。

問１　傍線部(ア)～(ウ)を現代語訳せよ。

◎問２　傍線部⒜⒝には掛詞が用いられている。それぞれ掛詞を踏まえて現代語訳せよ。

問３　傍線部⒞について、次の（１）（２）に答えよ。

　　（１）　指示語の内容を明らかにして、現代語訳せよ。

　　（２）　なぜ傍線部⒞のような行動を取ったのか、わかりやすく説明せよ。

問４　傍線部⒟を現代語訳せよ。その際、「花の衣」「苔の袂」がどのようなものを示すか明確にすること。

【解答と採点基準】

問１　(ア)＝姿を消してしまった　　(イ)＝我慢して夜を泣き明かして

　　　(ウ)＝見て取った

問２　⒜＝Ａ丑三つ時になってもあなたが来ないことから、あなたの心がつらいものだとわかりました。Ｂ今はもう、あなたのことを頼みにはしないつもりですよ。

Ａ＝７〔「丑三つ」と「つらいことがわかる」の掛詞が訳出できていなければ０。「あなたの心が薄情だ」という意味であっても可。「わかる」の訳出がないものは減点２。特に丁寧語に訳す必要はない。〕

Ｂ＝３〔「頼む」を「頼りにする」「あてにする」と訳せていない場合は減点２。「じ」を打消意志に訳していない場合は減点１。特に丁寧語に訳す必要はない。〕

　　　⒝＝Ａ眠ったら、夢にあなたが現れるかと思って寝入ってしまったところ、Ｂ寝過ごしてしまっての時を過ぎてしまったことよ。

Ａ＝３

Ｂ＝７〔「子の時を過ぎる」と「寝過ごす」の掛詞を訳出していなければ０。「ける」を詠嘆に訳せていないものは減点１。〕

問３　（１）　良少将はほんのわずかにすら、姿を消して出家しようという気配を見せなかった。

「姿を消す」「出家する」と訳出できていなければ０。「良少将は」は訳出しなくてもよい。「わずかにすら」の意味で訳出していなければ減点２。「気配」は「様子」などでもよい。

　　　（２）　Ａ出家の決意を知らせたら、Ｂ深く愛し、子どももあったその妻がたいそう悲しみ、Ｃ自分の出家の決意が鈍ることが予想されたから。

Ａ＝２

Ｂ＝４〔「最愛の妻」などでもよい。子どもに触れていなくても可。〕

Ｃ＝４

問４　Ａ世間の人々は、故深草天皇への服喪の期間が明けて華やかな衣装に衣替えしたようだ。Ｂ私は出家して世を捨てた姿のままだが、Ｃせめて帝をうしなった悲しみの涙で濡れた袖だけでも乾いてほしい。

Ａ＝４〔「服喪の期間」の指摘がなければ減点２。「華やかな衣装」の指摘がなければ減点２。「なり」を伝聞推定の意味で訳していなければ減点２。〕

Ｂ＝３〔「喪服のような姿」「僧衣」などでもよい。〕

Ｃ＝３〔「帝をうしなった悲しみ」を指摘していなければ減点２。「だに」（～だけでも）の訳出がなければ減点２。〕

【現代語訳】

深草の帝と申し上げた（帝の）御代は、良少将という人が、たいそう目をかけられてかわいがられた時であった。（少将は）たいそう色好みだった。人目を忍んで時々った女が、同じ宮中にいた。「今宵必ず逢おう」と約束した夜があった。女はたいそう念入りに化粧をして待つが、男は来もしない。（女は）目をさまして、夜は更けてしまっているだろうと思ううちに、時刻を知らせる音がしたので、聞くと、「丑三つ」と申し上げたのを聞いて、男のもとに、すぐに手紙を送った。

問２⒜丑三つ時になってもあなたが来ないことから、あなたの心がつらいものだとわかりました。今はもう、あなたのことを頼みにはしないつもりですよ。

と手紙を送ってしまったときに、（男は）目をさまして、

問２⒝眠ったら、夢にあなたが現れるかと思って寝入ってしまったところ、寝過ごしてしまって子の時を過ぎてしまったことよ。

と（下の句を）つけて送った。しばらくと思って、ふと休んだ間に、寝過ごしてしまっていたのだった。

　このように（少将は）いかにも才知にけた者と思われ、お仕え申し上げる帝も、この上もなくお目をおかけになっておいでだったときに、この帝が、お亡くなりになった。（帝の）御葬儀の夜、御供にすべての人々がお仕え申し上げたうちに、その夜から、この良少将は問１(ア)姿を消してしまった。友達や妻も、どうしたのだろうと思って、しばらくはあちらこちらを探し求めるが、うわさも聞こえない。法師になってしまったのだろうか、身を投げてしまったのだろうか。法師になってしまったなら、そうであると（いううわさ）もきっと聞こえてくるだろう。やはり、身を投げたのだろうと思って、世間（の人々）もたいそうかわいそうに思い、妻や子どもはいうにおよばず、夜昼、精進潔斎して、世間の仏神に願を立てては（悲しみ）もだえるが、うわさにも聞こえない。妻は三人いたが、普通に愛していた妻には、「やはり俗世間では過ごすまいと思う」と二人には言った。この上もなく愛して子どもなどがある妻には、問３（１）（良少将は）ほんのわずかにすら、姿を消して出家しようという気配を見せなかった。この（出家の）ことを少しでも言ったならば、女も、たいそう悲しいと思うに違いない。自分も、このように（出家）することができなくなりそうな気持ちがしたので、（その妻のもとに）立ち寄ることさえせず、突然に姿を消してしまった。

　（この妻は、自分は）どのようになっても、（少将が）「（自分は）こう思う」とも言わなかったことがたいそう（つらいこと）だと思って思わず泣き沈んで、初瀬のお寺に、この妻は参詣した。この少将は法師になって、蓑一枚をちょっと着て、広く諸国を仏道修行のためにまわって、初瀬のお寺で勤行しているとき（がちょうど妻が参詣したとき）であった。（少将が）局近くにいて勤行するので、この女が、導師に言うには、「私の夫がこのように姿を消してしまったのだが、生きてこの世にいるのであれば、もう一度逢わせてください。身を投げて死んだものであれば、（成仏するよう）その道をお導きになってください。そのように死んだとしても、この人の姿を、夢にでも現実にでも、聞かせたり見せたりなさってください」と言って、少将の装束、上下、帯、太刀まで、みな読経（のためのお布施）に出した。（女は）自分でも（言おうとすることを）最後まで申し上げることもできないで泣いた。（少将は）はじめは、「誰が参詣しているのだろう」と（思って）聞きながらじっとしていたが、自分の身の上をこのように申しながら、自分の装束などをこうして読経（のためのお布施）にするのを見ると、どうしてよいかもわからず、その悲しいことは、たとえようもない。「走って出ていこうか」と何度も思ったが、何度も思い返してじっと留まり、夜通し泣きあかした。自分の妻子たちが泣く泣く申す声なども聞こえてくる。本当にたいそうつらい気持ちがした。けれども問１(イ)我慢して夜を泣き明かして、朝に（なって様子を）見ると、蓑も何も涙のかかった所は、血の涙で染まっていた。「ひどく泣くと、血の涙というものは出るものであることよ」と言った。「そのときは（妻の前に）走り出したいという気がした」と、後になって（少将は）言った。

　（妻は）このようにし（て探し）たがやはり（夫の消息を）聞くことができず、（帝の）服喪の期間が終わって、喪服を脱ぐために、すべての殿上人が（をしに）河原に出たときに、童で変わった姿をしたものが、柏（の葉）に書いた手紙を持ってきた。受け取ってみると、

問４世間の人々は、故深草天皇への服喪の期間が明けて華やかな衣装に衣替えしたようだ。私は出家して世を捨てた姿のままだが、せめて帝をうしなった悲しみの涙で濡れた袖だけでも乾いてほしい。

と（書いて）あったので、この良少将の書いたものと問１(ウ)見て取った。「どこへ（行ったのだろう）」と言って、持ってきた童をあたり一帯にさがし求めるが、いない。（少将は）法師になったのに違いないとは、これによって人々は知ったのだった。けれど、どこにいるのだろうということは、まったく知ることができない。